



續  
積清軒  
譚  
家  
內  
心  
得  
草

一名保家法

全

ヲ 8  
166





門牌 8  
號 166  
卷

東京書院  
藏書

正位  
室  
三足書

三足書

三足書

明治三十八年六月廿七日分士氏寄贈

明治九年五月新刻

穗積清軒譯

家內心得草

一名保家法

東京  
書林

青山堂發兌

青山堂發兌



序

女令川女庭訓等後來婦人ノ教訓少シトセス然レモ皆慣習ノ說ニシテ婦人權利ニ於テ其大分ノ境界ヲ狭ハメルトカラス殊ニ家計ヲ管スルノ方法ニ至テハ其書絶無ト謂フモ可ナリ故ニ婦人ハ唯從順ノ美德タルヲ知リテ曾テ家事ヲ幹スルノ職分タルヲ知ラス甚キニ至リテハ獨顏色ヲ以テ良人ノ玩具ニ供スル殆盛弁疵花ト一般ナルアリ世ヲ憂フル者日本人民ノ卑屈耻無キヲ以テ獨男子ニノ責ム可ケンヤ此編米國婦人ノ實歴親踐ニ成レル者ニシテ其切實直ニ吾人家政ニ試ム可キアリ世ノ主婦タラシ人能ク此書ヲ讀ミ其躬行ニ反省シ履行セハ其結業ノ快樂何ソ獨今ニ流行セル歌舞踏ノ類ニシテ止マン哉

緒言

一人世ノ道夫ハ外ニ出テ、其産業ヲ營ミ妻ハ内ニ居テ其家事ヲ治メ夫妻相扶ケ内外相依リ以テ一家生産ノ事ヲ全フスルナリ故ニ内ヲ治ムルノ方宜シカラサレバ外ニ在ル者如何ニ其業ヲ勉ムルモ竟ニ生産ノ事ヲ全フスル能ハス是レ一家ノ主婦タル人其責ノ重クシテ決シテ其職分ヲ輕忽ニ思フヘカラサル所以ナリ今此書ノ要全ク其職分ヲ知ラシムルニ在リ



一此書ハアメリカノ婦人ビートン氏カ撰著セ  
シ料理叢書中保家法ノ一篇ヲ撮譯セルモノ  
ナリ但國俗ノ異同アルヲ以テ或ハ用ニ適セ  
ザル所アルベシ世ノ主婦タラン人此編ヲ讀  
テ能ク其情ヲ斟酌セバ治家ノ法其大略ヲ知  
ルニ足ラン

一此書題名家内ノ字々義ヲ成サスト雖モ通俗  
ノ便ヲ思ヒ姑ク之ヲ稱フ此字俗諺ニ因リ主  
婦ノ義ニ解センコトヲ要ス

明治七年五月

譯者識

家内心得草

一名保家法

總續清軒

人の妻たる者ハその夫の財産を預る者として一  
家の安全幸福も全く妻たる人の才能と其學識  
とに依るものあり世の妻たる人能くこれを考  
へおバ己き己の身分の實は重き事とを知り且つ  
其役前より怠りおれハ己れ一人の過あらざれば  
一家の風儀は係はる事を會得をべし  
妻たる者ハ總て一家の事を締めとく己一家入



用の品物を買ひ入るこれが拂ひを為さるどの  
 仕事をせば外は為さるべき業わざのなるへしや  
 亦ら家を治むるの學問の明細はこそ淺會得  
 せざるべからひやあるとき偽り多き下僕共  
 は欺むかれ或は己れも愚昧ある下女は等しき  
 愚昧ある指圖人とあるぬべし  
 家々の仕組の人数の多少あるが如く生計けいの道  
 も夫々不同あるべき道理あるは書物の上にて  
 何れの家も是相當する精しき規則を載せ難し  
 されど此書は述ふる所は一般通用の仕方は據

りし規則あるは諸般の生計を為さる人々も夫々  
 適うふふ處あらん且つ又多年たう験する實地の話  
 は家事の學問する人にも大に用立つ者あるべ  
 し  
 妻たる人若年ある時は大に家事の混雜あるよ  
 困む者あるはひとつの上手なる仕組立ち一  
 家の常例一度は定まらば出の苦しみは失せて  
 却て極りよく物事便利は行ひ得へきあり  
 一家の主婦とある人の縦令は愛敬よく器量も  
 ぐれ才智もあるはとて己れが役前は正しき裁きり



決あき人へ一家の者を幸福に進むる事の叶ふ  
 主婦たる人の能く家内を支配せしむるに  
 己を却て家内の者に支配せしむるに譬へ馬  
 を使ふが如く万一の事をねば決して鞭を揮  
 ふとなく唯腕と手綱を握るへし其の手綱も  
 怠りあれは早晩己が手をそふれて目下の者は  
 拾はるへしそを由へ仕事の忙しき人杯はその  
 妻の怠りよりして終はぬ奴婢の世話を受け餘  
 儀なく彼等の正直と出精を頼むるも至る

主婦の早起は奴婢の早起よりも尚ほ大切なり  
 若し主婦たる人早起せざれば奴婢等も亦少し  
 猶豫をへしと思ふが故なきされども縦令は主  
 婦の起き出るに極りあるとも奴婢等の情とし  
 て己も未だ掃除せざる部屋は主婦の来らん出  
 と悦ぶぬものなきはよくその時刻を圖りて  
 行くべし  
 主婦たる人の晩くも七時より起き出づへし此  
 時刻は早起の家より甚ど晩く見ゆとも世間



通例のよき時刻あるへし主婦たる人起き出て  
 おの先つ冷水よて手水致遣ひさつむりと朝の  
 化粧を済ませへし去せを終れぬ部屋を出つる仕  
 度を済ませへし但し部屋を出ぬ前よ寝床の側よ  
 二つの椅子を並べ出の上よ残りぬ夜着を裏返  
 して置くべし又雨天の外ハ必も部屋の窓の戸  
 を開き置くへし斯くて後夫と己れぬ寝衣ねまきの既  
 よ干したるを疊たたをぬれ箱の中よ藏め次よ刷ハシ  
 毛並まよ櫛くしなどを夫れく相當の場所よ置き化粧  
 臺をい綺麗よふしすべて物の順を正しくし全室

を綺麗よきへしやて此等の仕事致終りふは鍵  
 囊かぶを持ち朝の食事の間よ至り鑰を鳴らして茶  
 を煮る合圖致済ませへし斯くて己れぬ食卓しょくたくよ具  
 ふへき品々の夫々相當の場所よあてて皆綺麗  
 よ調ひよるや致吟味をへし  
 若し幼兒ある人ふきば己か部屋を出る前紙戸  
 よて輕き上着を被ふり幼兒よ朝湯を遣せしむ  
 へし茲よ戒むべき事ハ如何なる年齢の小兒よ  
 ても湯を遣ひよる時ハ母よる者の外誰よも  
 決して去せを拭せしむることありき去ぬ小兒



を拭ふあと丁寧あらま又ハ手あらくまるとき  
 ハ小兒の皮膚ひふを害まること可いきバなり  
 此等の事を終りあバ朝飯の間ニ至り朝飯の合  
 圖を鳴らまへハ大抵主人ハ九時ハ家を出る  
 者ヲきバ八時ハ朝飯を供ふまバ家の仕事ハ程  
 よくゆくものなり  
 天氣好き日ひをきハ九時よりハ窓を開き其外の  
 戸口を毛盡く開き清き空氣を全室ニ流なが通とせ  
 びべ  
 夫の食事ニ來る足音を聞ッバ直ニ皿を温めよ

との合圖をなまへハ西洋の料理ハ脂の品しんなま  
 固かたまることあり又皿いしの冷ひややあるときハ  
 多おほくハ時刻ニ逐おもる者ものヲきハ妻つまたる者兼テ  
 用意ハパンを切り又パンを揚げあどテ夫を  
 待ち受くべ  
 夫家ニ歸れハ表衣うしろぎ帽子ぼうし蝙蝠傘かぶとふどを刷毛はらこをも  
 テ拂はらひ置おくへき事を言いひ付つくへハ斯かくテ夫  
 の家を出るゆきハ自ら助けて夫ニ表衣を被せ  
 帽子を渡わたしまと能く傘かさニ目を付け吾われガ言いひ付  
 けたる如ごとくマアテあるやを心付くべ



總て家内の事へ主婦たる人瑣細なる仕事まで  
 も手傳ふ事故喜ひ又出せを爲し得るあらば諸  
 事極りよく手速し行はるゝ是のあり  
 扱て夫の家を出しや否直は朝飯を片づけ第一  
 の仕事へ此日の注文品を命する爲め先づ臺所  
 へ至り料理の事より始むるあり  
 臺所へ入らば料理人へ向ひ先づ常例の挨拶を  
 せしむるをせしり肉部屋へ入るへし出くはてへ一  
 と通り見たるのくよてい宜しからを能く肉類  
 その外の品々を吟味をへし若し此内は少くは

て是己をく目は不快し見ゆる物あらば何よて  
 も決して捨て置くかとあをを但し是等の手落  
 あををとして召使を叱り譴んよりい己を通りか  
 からおれを直し置く方甚だ穩當あるべし又新  
 參の奉公人あやの如き事おれぬ者をしておれ  
 をあやば主婦の丁寧ある仕事の妨げはおそれ  
 せぬうおれをあしめても亦妨げはかりいせぬう  
 せぬうは主婦を恐る臆するの心あらしめぬや  
 う心懸くべし  
 飯の仕度の主婦の工夫したる物を書き出をを



以て最もよくとを去の書出しあれ料理人の  
主婦の仕度せんと思ふ物を悟り各の皿鉢に威  
るへき品を細く知るへく又去の書出し肉  
屋青物屋あども有用なるものなり  
さればとて主婦たる人日々の食物を注文を  
むらまよて足れりとせし只當座の考へあれ  
十分の料理を供ふる去とい出來まじ  
英吉利よて秋の羊の肉を八日の間懸け置く  
こと間々あり又冬なれば十四日乃至廿一日位  
の間懸け置くも尚長くとせばやをば心懸け善

き婦人の冬の間へ絶へて肉の二節三節へ懸  
け置くと云へり  
總て肉は只新らしくて堅きよるよく懸け置  
きて軟らうある方が消化し易きものあり故に  
箇様ある肉を買入る料理人の心懸けよき者  
と信用をべし  
主婦たる人吾夫の食物の勿論召使の食物は能  
く心を用ゆるへ最も好く家内の健康を保つを  
のと云つべし  
料理人の勤むべきは献立の品を勧め指圖する

家内心懸け



そのよて年若ある主婦は、大に助けとあるものあれども、こゝよりらぬ事を、若し此の如き事あらば、と威光を示し、己れ箇様の品を供ふるこやを好まざる旨を答ふべし。奉公人の我が主婦の指圖は、厳しき儉約の心あるを察せると、然らば必し兩様の處置を考ふべし。即ち身を委ねて、全く主婦の心小従ふべきや、あくばその務を引くもの二つあり、何をよても主婦よ、はよろしきども、初の方なれば、雙方共は快らるべし。

主婦たる人召使共は、向ひては必し正しき信實の話を、おし嚴重よ、は、但し新參の者よ、は、格別よ、能く心を付け、無用なる言葉を吐くへ、加らば、總て年久しく慣れざる召使よ、は、何事も打任せて、心以許さへ、き、おれども、新參の者よ、は、主婦の心中よ、一つの界ひを立て、おれを別よ、置き、若し空談よ、は、と誘ふと、あらば、速よ、おれを止むべし、但し是等の事の親愛を以て、おれよ、難けれど、も、手練と威光とを以て、せば、易らるべし。年若き主婦へ、變事は逢ふとき、は、動も、おれよ、は、召

家内心得草



使は向ひ高聲は呼び立つる去と間々何れども  
大に悪しき仕方にて此事よめて憎み厭ふへ  
き我儘を得せしむるに至るあとあり  
備て臺所の見巡りを終り外に出る時の食具の  
置場水の流し場其外の所をもよく見廻り總  
て清潔ふして次第正しくあるやを視つゝ心の  
中は思ふへ己をい夫の所有物を支配する役  
前あきい仮令ひ一点の手落あるも其勘定は皆  
己せが身は來るふると又家の存しあらゆる物  
は皆夫と己れの持物なりと己れ自ら諸品の清

潔は見ゆる事は心を付けぎむい仮令ひ奉公人  
は向ひて去の注意あらん事を望むともその詮  
あき事あらん  
臺所を出てふ家の間ごとを見巡り悉く清楚  
よして次第正しきや否を見るへしあせし後  
先つ自身の部屋に至りてその内の隅々をよく  
改め下女等の心付らむ或は人身は障る如き悪  
しき僻を搜り出さし特り行届きたる主婦の眼  
力はあるのみ  
窓へ總て奇麗に見ゆる様をわし道具の上と

家子心得草

九



2ハ半点の塵をも措くへからむ毛氈の上は糸  
 屑を引き又汚点と付けぬ様は心を付けへ又  
 總て水鉢ハ奇麗にして水を満たしめ部屋の内  
 2ハ絶へぎ熱湯を貯ふへ又天氣好き日ハ手  
 拭を園中ハ晒し或ハ臺所ハ乾く置くへ又  
 帳帷ちやうひの類ハ折目を正しくし簾ハ真直まぢま懸るや  
 うは整ふへ  
 次ハ夫の部屋ハ行くへ此内ハ在る湯殿ハよ  
 く乾きて少しの汚れもなき様にして水瓶ハ十  
 分ハ水を貯へ乾きしる海綿を籠の内ハ入を又

化粧臺を淨め側らハ刷毛ハシを置き總て物の順を  
 正しくもへ又省ハ必き一對ハ揃へ置くへ  
 若し吾夫家の内ハて仕事を爲る人ハ並ハ上皆  
 2刷毛ハシを掛け何時ハても用ひらる様ハ整へ  
 置くへ  
 物置ハ現在用ひてあらぬとも次手ついでハ出を見  
 廻り窓を開きてよく空氣を通さへ  
 次ハ召使の部屋ハ至るやり出くよてハ唯空氣  
 ハよく通へるや窓ハ開きてあるや寢床ハ備え  
 きたるや汚水ハ流したるや牀とこハ清潔なるやを



一と目視するのこゝまで宜し但し主婦の兼て召使  
は告げ置くべし余は一日は一度つゝ汝等の部  
屋を見廻り部屋の料總て掃りよく清潔なるや  
を改むへしと去らぬ婢等をして物事隠しだ  
てする事あらしめ且又不潔不養生の仕解を  
防ぎ家内の人々をして皆心地よく暮るの便り  
を得せしむるをのちり  
戸棚の吟味は家の間毎より始め最も小き所ま  
でも残を去とせよ且つ入用の品々の夫れく  
其場所は在る様をへし置るを

水の仕出しと遣ひ道とい能く出れを心付け規  
則を立て、吟味をへし新聞紙の反古おどの溝  
を止めて多くの出費をふくことあり又水の仕  
出しは十分なきへし一家の息災あるは此瑣  
細なる事は大に係るをのちり主婦たる人の  
心得置くべき事あり  
水竇は暫時あつとも去をを心付けぬ時ハ終  
ハ流行病を醸し成るへし此の如き病の原因ハ  
主婦たる人の家族の息災を保つ用心なきに  
あり



又折々の屋根の溝を吟味し嫌ひしき物の取拂  
ひ雨水の自由と通もるやうにふまへ  
家の外の四面に其主婦たる人の行状を表はす  
標おきい能く去きし氣を付け見苦しき事の本  
き様と心懸くべし  
奉公人の仕事も定りある故よしとせむば主  
婦たる人も成る可く丈規規則の通りと日々の  
手順を行ひ必も不意ある事候おして人々を驚  
かしめぬやうふまへべし折々の故障起りて妨  
げらるし事もあるべしせども暇と心得ある主

婦は一週間位ひ十分は己れが目當の通りと  
事を行ふべし人々の難き事なきとも左  
人々の働く時刻を定むるに難き事なきとも左  
ふ示を所い必も主婦の爲にへき仕事なき毎日  
朝十一時迄の家と係りたる事と朝の務をふし  
月曜日の朝飯前と衣服の繕ひを仕上くるなり  
天氣好くは十一時よりの毎日散歩し先づ家と  
係りたる用事を辨し斯くて後人の家へ返礼し  
行くや或ひは四時までよき集會に入るあり四  
時よりの五時迄の手紙残書くや又は大切なる書



物を讀むあり但し格別要用ふらざる書い夜分  
み讀むへし五時よの若し用向あらば二楷を降  
りて料理人よ夫きく相談しよく四方の目を配  
り六時の夕飯の仕度を見廻り又楷子を昇りて  
下女の針仕事を見るなり尤もこれハ常ニ主婦  
の部屋よて爲さしむへし斯くして後食事の間  
は行き總て仕度の調ひとるを見ても己れハ酒を  
出し食後の菓子生花などを供へ六時十五分前  
ふハ食よ就く人々を待ち受くへし食事終りお  
ハ珈琲を飲み或ハ音楽或ハ讀書或ハ骨牌又ハ

輕き針仕事をふまふり

夜よ至せハ妻たる人ハ只茶燂煮て夫の側よ侍  
るのよあて終りの仕事ハ間毎の戸締りを見廻  
り道具場流し場の清浄あるや否を見分し總て  
手落ふきを見届けたる上寢所よ入るへし但し  
此時ハ十一時よ遅かるへからむ如何よとふ  
れハ主婦たる人ハ必も朝七時より起きて數ハ  
難き一日の仕事を爲せ出とふれハあり  
總て家の仕事の細き所ハ主婦たる人これ成  
心付けへしたとへハ入口の段ハ毎日奇麗よ



て白くをるやロ々の戸ハ日の暮れハ必以去  
 れを閉づるやまゝ朝ハ早く去きを開くやを見  
 るの類あり  
 家内ハ小兒ありて乳母かきハ母ガ乳母たる  
 亦かゝる人ハ禮式ハ係りたる客を受けを又  
 自分の方よりも行くハからを少くも午後の暇  
 即ち小兒のを得る迄ハ一家の務めを爲すの  
 遊ふ時ありとをへハ無益なる客のためハ絶へ  
 去家事を妨げらる程心を苦くむる者ハあり  
 也

小若き主婦の難事の二つハ家の勘定あり去の

勘定ハ帳合の定法ハ従ハハ貸借の勘定を精細  
 且記を事の出来る婦人ハ之ハ尚や心配の仕  
 事あり一年の小遣金を受取り己ガ身ハ引受け  
 て一年を終りたる少婦ハ家の勘定を程よく扱  
 ふ去との甚ハ難きを知るハ斯く言ハハ物慣  
 れたる老婦ハ可笑く思ふハけきども容易き  
 帳合の仕方を教ゆるハ亦益ふき事ハあらざ  
 帳合の仕方ハ許多あきども左ハ記せるハ余ガ



世の主婦たらん人又勸むる事の出来る程容易  
き仕方ありと信する事を茲に陳ふるあり  
主婦へ先つ奇麗なる細長き帳面を綴り次は石  
板と牌子を整へ置くべし是等の道具は勘定方  
と云ふ商賣の財本ありきて帳面へ主婦たる人  
己が帳場は置き石板の臺所は懸け牌子は己が  
財府のゴム紐は挿して隠しの裏は置くべし  
何時までも金錢を拂ひたる時へ先つ直は牌子  
はぎの筒條を記きへしかくして土曜日毎はこ  
れを取りもつしその筒條は勘定帳は寫して更

は新しき牌子を挿し置くべし  
又土曜日毎は料理人より石板を受取るべし此  
石板は料理人の臺所にて拂ひたる小遣はて  
いまだ一週間の帳面は登らざるものを載せり  
主婦へこれに肉屋、麵包屋、牛乳屋、荒物屋、青物屋、  
洗濯屋、おどの拂ひを加へ加算するなり  
斯くして後こまを一週間の勘定帳は寫し取る  
へし但し左の雛形の如く受取高は悉く上の段  
は記し下の段は拂ひ高を記するなり

小遣一週間仕上帳



受取口

一月正金 三、四六五。

仕拂口

洗濯屋 二、八六四。  
 肉屋 七、三一二。  
 麵包屋 一、七二五。  
 荒物屋 三、二二〇。  
 牛乳 一、八一六。  
 青物屋 二、二一八。  
 雑品 六、六六五。  
 鰻 四、一五五。  
 魚 一、二七八。

残金

三六、四六〇。

別格の拂

三、四六五。

廿三日正金 四、二一七。

廿四日同上 一、二七六七。

料理人 二、七八四。

下女 一、九一六三。

運上 六、三九二。

區入費 六、五四五。

五三、八八四。

一季の勘定

受取口

五三、八八四。

仕拂口



第一週 一月一日

三一、四六五。

三一、三四。

第二週 一月八日

三一、四六五。

三〇、一二九。

第三週 一月十五日

三一、四六五。

三一、四六五。

第四週 一月廿二日

三一、四六五。

二九、七九七。

第五週 一月廿九日

三一、四六五。

二四、九九一。

第六週 二月五日

三一、四六五。

三一、一二。

第七週 二月十二日

三一、四六五。

三〇、七九九。

第八週 二月十九日

三一、四六五。

三一、九六九。

第九週 二月廿六日

三一、四六五。

二七、五一。

第十週 三月五日

三一、四六五。

三五、九五。

第十一週 三月十二日

三一、四六五。

二九、五四九。

第十二週 三月十九日

三一、四六五。

二三、五四二。

第十三週 三月廿六日

三一、四六五。

三〇、三六九。

殘金

二一、七八三。

四〇、九四五。

四〇、九四五。

別格の拂

正金 一月三日

六、五一。

地代

六、五一。

同 一月十日

一、七六八。

運上

六、一九三。

同 一月十七日

四、一一七。

區入費

六、五七五。

同 一月廿四日

三、五五八。

給金

四、一一七。



同 三月廿日 二三、七一九。

石炭 三五、四五八。  
酒 二三、七一九。

一七三、五七三。

一七三、五七三。

是迄まで受取仕拂共は出来上りふりきて一季の末即ち十三週の末より右より示したる如く毎週の日附を記して受取仕拂のメ高のミを記すへし此の如くをまき毎週の平均ハ一週間の勘定を以て知り毎季の平均ハ一季の勘定を以て知るを得べし  
又一週毎は運上給金の如き別格の仕拂を下段

よ記し上の段は是等の爲め別は夫より受取りたる金高を記すへし斯くして後始て一週間の真の費用を知るへし但し箇様なる別格の出入りも全く家事に係りたる事ふあらされハ記載せざるあり  
又右の外は諸勘定の一目表を作るへし其の十三週間は諸口へ拂ひたる高の書抜よて一季の間は諸品は何程費したるやを一目して答ふべき爲に作るなり  
やまども一家の勘定ハ主婦たる人持り己れが



勘定帳のくを以て終まりときへうす諸商人  
の通帳を料理人の手控ふる石板に照し合はす  
べしとてい肉屋をきい肉の通ひは合せ然る  
後諸帳面を締めぬべし  
肉の通帳は常に臺所は懸け置き肉を送り來る  
時主婦たる人其目方を通帳と照し合はすべし  
勿論料理人の肉屋の我が門口を出る前は必  
肉の目方を試むべし若し肉の目方正しあらね  
ば主婦は通帳を書き替へききるべし又肉を返  
るべし其の外青物屋麵包屋の類もべて目方は

て賣る品の皆出の例に従ふべし  
洗濯の拂ひは日曜日の朝召使の下女主婦の目  
前よて去きを勘定し主婦たる人其筒糸を洗濯  
帳に書き入るべし又洗ひ物の洗濯屋より歸る  
たるときは渡せし時の帳面と其數を照し合は  
べきなり

### 買物の事

茲は一家入用の品を買ふに付心得べき話あり  
主婦たる人の多分お金錢を持ち自由な物を買



へいとて足きりとい言ふへあらむ巧者なる買  
手とあることを心懸くへいさぞとていさぞ能  
く物の價を知らむ最も低き直段まで引かせ  
手段を知らざるに猥りな價を敵くへ去れを巧  
者ある買手と言ふべし故に主婦の常は時  
の眞實の相場を知り丁度其價を以て買ひ得る  
う或へ又自ら外に出ておは尚ほ安き價にて同  
様の品を求め得て自身の足勞をも償ふは足る  
よへ如何よしとよあるべし其手段を知らざる  
へうらび亞米利加の婦人の驚くへき程巧者

ある買手ある彼等へ細うと吾々需むる品の價  
を知り必む其價にて手を入るといふ但し彼  
等へ物を買ふ前によく心掛け諸方の店は行き  
種々の相場を尋ぬるなり  
肉を懸け置く事の出来る時節ふとへ肉部屋へ  
至て入用の場所ふと此時節よへ一週間入用丈  
けの肉を一度は買ひ入を料理せむは其儘懸け  
置くへい

奉公人を抱ゆる事

此大切なる事を世よへ手軽く思ひ替ゆべき却



て勵むとふるもの、やうに言ふ人もあれども  
斯る人の斷へを召使を替へるのまゝで嘗て善  
き奉公人の味ひを知らざいつも頼情 齒茶 なる  
者の爲め、窘めらるゝまのあり世の主婦たる  
人奉公人を抱ゆる事を大切ふと思ひ、其行  
状證文奉公人の暇を取る時其主人より當人を  
の行ひを慥なりと請合ひて渡を證文を  
取らざる前、篤とこまを考ふへきあり、茲に奉  
公人を抱ゆるの四つの手段あり、第一は出入の  
商人は因りて求むる事、第二は奉公人を抱へた  
き由、残引札の類、よて廣告する事、第三はこまを

應ぜし引札よて知る事、第四は奉公人扱所、請  
ひ求むる事  
出入の商人は因りて求むるは古き仕方よて去  
るよ、二三条の不都合あり如何にと云ふは斯  
くして抱へざる者へ自然已れ、世話人の利益  
を謀るへし例へは肉屋を去へ、仮令肉の目方不  
足あるも又肉の少し下品なるも已れが爲め、  
へ恩人かれへ見知らぬ体、濟を採の事あるべ  
し  
又斯る奉公人の多くは近所は友達あり、懇意の

家持心得草  
三



人あり或ひは又我が近所の家は仕へし事ある  
如き其外種々の不都合多あるへし  
奉公人を抱へしき由を廣告するへし  
得る場處なきは最よき仕方なり此仕方なきは  
主婦とる人の十分は其人とありを察し我意は  
適へる人物なきは尚ほ委しく相談を整へ若し  
奉公せば永く居るへきや否やを知ることを得  
へし  
又奉公人の方にては年季の長き短きを問はざ  
して只場所柄と主婦の性質とを考へ相談の整

ふや否やの専ら此二ヶ條は在り  
廣告は應せし引札にて知るまとい決して奉公  
人を得るの慥なる手段はあらば且つ日に限  
りて求むる時おどし依るべあらざる仕方な  
り  
奉公人扱所又ハ口入所にて求むるは最もよき  
方なり此二ヶ所の中は頼めは主婦ハ十分は奉  
公人を見たる上にて雇ふ事を得るなり但し其  
人物は扱人たる者出きを吟味をべし  
の便利は指し響く採あひの細事は至りては多人數

良母の専ら



を扱ふ事なきべしこれを請合ふこと能はざる也  
へ主婦たる人の工夫よて其奉公人の旧主は面  
會せることを得れい決して懸念をべき事にあ  
らび

茲にまゝ奉公人を抱ゆる安全の方何ぞござい  
主婦たる人我々暮し方と丁度同どき程の暮し  
を以て家は二年餘は仕へたる者よて其家の  
主婦も此者を色い正直よて能く働き慥なる人  
物なりと言ひ又其主婦の様子柄も賤しからび  
一家の主婦たるべき人ふ見へ且つ其家の内も

是へて始末よく整ひたる處は仕へたる者を抱  
入る事なり

凡て奉公人の以前の様子を知らぬ大ひは都合  
よきをのちり故は奉公人の他所は在りし時の  
事の委しき出を尋ぬべし

斯く種々の手段ありと雖も若し出を施すこ  
と拙りきり百計悉く破るへし其故は今暇を取  
らんと云ふ奴婢等が新來の者は場所の悪しき  
事杯を言ひ述へてこれを妨くきりなり主婦た  
る人のよく戒しむべき事なり



奉公人を雇ひたり其役前の模様を明細に示  
せべし又休日を選むる事大切なり但し其の休  
日ハ日曜日を以てべし其外瑣細の事までも奉  
公人の明らるに由きを解し己が引受たる場は  
立ちて暇と其仕事に懸るゝ事の出来る程に説  
き示し置くべし又給金の年々増えべし斯く  
爲せし大ひは彼等の働きを勵ましむるのなり尚  
又善き奉公人ハ働く甲斐のあるやうに心付  
かせるべし

双方の約束一旦定まつたる上ハ仮令其人物

成厭ふ事あるも主婦たる人ハ丁寧な由きを取  
扱ふべし世間ハ奉公人を罪人の如く扱ふ  
主婦ハあるをきども斯る事ハ決して爲さべし  
處置ハ何らば

奉公人を抱へる時主婦の心得方並に尋ねべき  
箇條

一給金を前より與ふべき其都合如何あるや  
一日曜日ハ暇を遣り寺院又ハ礼拝堂に遣ら  
へき事

一料理人ハ肉汁ソーグの事よとぎ煮焼の事パンの製法せいほう



其外一般の心得方及び儉約の方おどの事

一 乳母をまへ性質深切よくして心掛けよく且つ

是迄自身は手覺ある事

一 下女をまへストーヴの扱ひ様を心得且つ心

掛けよく物事は綿密なるべき事

一 娘の侍女をれい性質物静くよくして謹み深く

衣服の仕立方巧者あるべく髪結ふおとも上

手なぐるべき事

此外使ひ道の異なるは随ひ其人柄も異な

るべき事推し測るべし

一 又以前の何方は幾年務めたるやを問ふ事

一 又其家を去りし如何なる次第なるや何う

過ちありての事なるや外は子細のある事な

るやを尋ぬる事

主婦の右等の事を尋ねし後右の始末と今日

よき奉公の年期並に給金の高とを一冊の帳

面は記し置くべし

召使の日々の仕事

召使は先づ間毎の寢床を片付け汚水を流し次

に家内の打寄る居間を掃除しよく諸道具を整



へ置くべし斯くて後名々受持の掃除を始むべし誰が家よも日々の仕事よい夫れく規則あるべし今次よ示せる規則もよき手引あるべし

一月曜日

寢所の掃除と洗濯

一火曜日

客間と書齋の掃除

一水曜日

食堂の掃除と熨斗と掛る事

一木曜日

主婦の寢所と納戸の掃除

一金曜日

應接の間の掃除

一土曜日

皿鉢階子雑物の掃除

乳母の役前へ小兒の部屋を掃除し自身の部屋

をも掃除をべし

料理人へ上り段客の間並し廊下臺所肉部屋食具の置場洗濯場楷子の下の押入杯を受持ふし掃除をべし又主婦の言付よよりてい食事の間を掃除し或い寢床を敷くを手傳ふこともあるべし

召使の宛行の事

召使の朝飯へ茶、麵包、牛酪、或い腸干チヂミを通例とす午飯へ温き肉と野菜とを與ふべし夕飯へ麵包と肉或い麵包と乾酪なり



青物の重は馬鈴薯と菜あり

肉は一週は三磅二分の一

牛酪は一週は一磅二分の一

砂糖は一週は一磅二分の一

茶は一週は一磅二分の一

麥酒は男は一日六合女は三合なり

麵包は一週は一磅乾酪は一週は一磅四分の一

肉汁は家の掃除料として一週は一磅を與ふべ

しるりん

右は示を所は世間通例の宛行なり總て主婦を  
 する人へ召使の息災の爲めと我が儉約の爲めと  
 我酌の量り折々へ快き變りたる品我與ふべし  
 奴婢等の痛く働きたるときは多く麥酒を求む  
 る者なきは主婦たる人へ兼て良き麥酒一樽を  
 備へ去をを料理人は任せ置くべし斯くおせは  
 奴婢共の心は十分を覺へ酒屋は頼みて「ビール  
 の徳利我買ふ々如き厭ふべき去と無るへし  
 洗濯も家までせざるは其代料を與ふべし  
 但し一シルリンよと一シルリン六セントまで



を與ふべし

六週間一度召使は休暇を與へ日曜日の夕は外に出るふとを許すべし

給金の必を四季に拂ふべし即ち三月の廿五日六月の廿一日九月の廿九日十二月の廿五日あり

召使の扱ひ方

余の考ふるに凡そ主婦たる人召使をして物事はよく心を付け綿密に爲さしめんとし己を平生彼等に對しては何事も隱さずとなく打ちあ

けて正直なあるを善しとすべし

何れの家までも主婦の屢々奉公人を替へ又これ又つき苦情を言ひ立らばどいその過ち多くい主婦の方には在り譬へて言へば馬は罪なくして御者は罪あるが如く御者れといひ輕うらんよ申とくする手を持ちやば馬は善く共走り其仕事を情ることあるべし

召使は過失をばとて決して其朋輩の前又は他人の目の前にて非難をへからば若く箇様ある事あらば主婦は徐々彼等を呼ひて親切に



言ひ聞かせ彼等を助ぐんとするの意を示し決  
して其事柄を賤しめ彼等の我々目前より出るを  
臆することあきやうよとへ

召使共の争論は往々一家の平和を乱り終るは  
彼等を退くるに至るものなれは温和よして且  
つ堅固なる事と左に記する仕方とを以て此を  
を鎮むへし即ち甲が乙の事と付て語ることを  
聞くべしとび又古參の者も新參の者の様子を  
尋ぬる處とあはれ

よ呼ひ兩人は斯く言ふべし余は汝輩の争論の  
間に入りたる處を好まざるは汝輩其好む所を  
言ひ其欲する所を爲すべしと雖も余は此家の  
内にて喧嘩口論の聲を聞くべしと大抵は  
斯の如く言ひて敢て喧嘩を止めざる方と反つ  
て能く此を止むるものあり但し此仕方ハ奴  
婢等の間より起る風波を鎮むるよ妙薬なる處  
とを余が験したるは其口上の儘を茲に示さず  
是をきども此れを言ひ得る人の唯温和よして  
決して怒りの言葉或用ひて速にき挨拶を



為さる婦人のこゝろ

例と教といひ並ひ行はるべきものよて例を示  
 せし教を施し教を施さば例を示さべし  
 我々の實驗は由りて見れば凡て世の中の事  
 て我心は他人も斯く出そあらんと思ふ事ハ我  
 を必らび出れを為さる余ハ吾心の屢々惡事  
 正導ひかきんとを防ぎり人を人々も亦皆  
 正直ふして斯くあらんと信するあり  
 故に我々小供の惡事を為さんとする時あれを  
 防ぎ止むる如き凡て家族を保護するハ主婦

たる人の役前よしてこれ亦余が為せし事よて  
 世の主婦も斯く出そあらんと信するあり  
 年若き下女ふどの夜は入して郵便所は行き又  
 ハ麥酒を求むると外は出る出とを許さ勿き  
 ○僅々の金子よてもこきを郵便局積金所へ預  
 くるやうきむべし○衣類を買ふときいよく  
 恰好なる品柄或指圖をべし且つ決して古びた  
 る華服を與ふべし○讀物ハ聖教の書に限  
 らび慰むとふるべき善き書物をも授くべし○庭  
 の草花家よ飼ふ鳥獸ふどは氣を用ひるやうに導くべし



○又小供の世話出来ざまの不都合なるもの故手の廻らぬはゆゑぬとも常はまきをを手傳せしむべし  
 又主婦の卑劣あらぬ用心と儉約といふ如何なる諭しよとも召使を直まふと多あるべし召使とても主婦のよく氣を付けて灰を拂き出し無用の燭光を消しかどして當然の儉約を爲きを見れば彼まも亦主婦の所持の品をれば勉めて儉約せんと思ふふるべし  
 若し主婦たる人(聰明なる人として)の心は召使を疑ふことあらば強ひてまきと共に居るは快

ろよありぬものゆへ速まおれを替へるを以て最もよくとを但し此の如き疑の原因は多少あるものかまきまも主婦たる人自ら召使の跡は従ひて臺所は至り一々油醬油類の分量を正しく用ゆるや否やを見るなどの事ハ出来ぬゆへ斯くして召使を替へるを彼等の斷へざる少しづゝの盗まを防ぐまを得べし但しまの少しづゝの盗まも大は一家の經濟を傷ひ終り我が財府をも空ふるまに至るまのと知るべし  
 主婦の心得べき事



家内心得  
柔和親切堅固の三つは主婦たる人への欠くべ  
あらざる性質よして奉公人の務方を能く辨へ  
居るべき事と同様は大切なる者あり余又茲は  
一の話ことばを加へん最も善く治まれる家へ主婦た  
る人決して奉公人と話しをなさば徐ろは物を  
言ひ付り尋ぬべき事或尋ね朝夕の挨拶を爲す  
の外は決して言葉を交へざるなり勿論此事は  
奉公人の身よとり悲しき事の何ぞして誰をとて  
其鬱さを洩らさへき人も何れぬ時や或は只一  
人の奉公人よて平生話を相手へ只主婦のミを

る時や又へ古くよる慣をたる奉公人杯へ格別  
よて此等よは適うふふべき事ふ何らねども通例出  
の仕方出そ主婦たる人よは最も安全なる掟あ  
らん

二人の奉公人を使ふときへ主婦へ其指圖よ一  
しは多くの時を費さふりさきども彼等の仕事  
を終へたる毎よ出をを吟味し掃除の行き届ら  
ざる所等閑よ爲せし隅々ふども能く心を付け  
且つ過ちあき直よこをを改むるやを察し凡  
て家事よは細密なる注意ちういを用ひさきよは叶をを

家内心得

三三



奉公人の過ちの最初の一年程の間ハ決して去れを見遣うることなく親切に去れを諭し静く去れを示すときハ其後ハ去れを直に言葉を  
用ゆる去と云き至るべし

奉公人も最初の間の主人の機嫌を取らんが爲め自然彼を一杯の力を出して務め只管家の風儀を教へらむんことを願ふのみなきども彼れハ直に此主婦ハ物事ハ綿密なるや否を悟り得べし斯くて後ハ仮令ハ行届きて巧者なる手の指圖を受るも或ハ懶惰らんどう輕率けいそつなる人の配を

受るも如何様なる主婦の指圖よてもそむべき應じて自由ハ所作をるりのあり外の務を爲る主人の心得と爲るべき事ハ内の事を治むる主婦も同様ハ心得べきなり一家の主婦たる人の第一ハ注意あるべきハ勿論能く心を留めたる目づらひあること肝要なり又一家の妻たる役前哉悉く辨へざるへならず又己を自らハ事ハ綿密なると奇麗を好む事と物の順序の正しき事の手本とあるべき者あるを知らるべきなり



我夫は仕へ一家を治むるの役前を盡し程の主婦ハ萬事ハ綿密にして且つ注意あるべし但し此綿密と注意あるとも仕打と言葉とは於て柔和親切あることを欠くべきものハ何れもさきハ若し奉公人の病ハ罹り或ハ心配の事おどのある時ハ親切よこせを勞り心を添へて出せを助くへし

浪費ハ一家儉約の方を破る大害なり若し日々の食物を猥し費し拙ふく買入を拙ふく料理し拙ふく煮焼して凡て家財死費は流せゆらば

果ては奉公人の病ハ罹ら出とあてて醫師を招き藥を求めんよもこそは拂ふの金おきよ至るおらん元來儉約と注意とい他人を助くるの力と云ふ意味あり故は平生の儉約ハ人間の生涯よ出遇ふ難儀は當り善き舉動を為せしむるものあり

小兒養育の方

主婦おらん人の大切よをべき第一ハ小兒の養生を成るべき場所おれハ家の一番高き處よよく空氣の通ふべき廣き部屋を小兒の爲めよ



設くへい  
 小兒の部屋へ晝の子守り部屋と夜の子守り部  
 屋と二つ入用なり但し夜の方へ晝の方よりゆ  
 廣のるべし此内は手輕なる寢床を置きその左  
 右は毛氈の切きを敷き小兒の足の床より柔ら  
 げ下るやうなやうをべし  
 寢床の下は必ず一足の上着を備へ置き小兒  
 よいこぎを着けぎぎの階子を降るへうにびび  
 教へべし  
 蒲團ハブランケットの二枚折を以て被せぬ

る堅きものにて宜し  
 小兒の椅子面洗ひ臺腰湯の桶ふどを備ふべし  
 部屋毎は火爐を置き且つ夜間空氣を通はる爲  
 め烟筒を作るへし亦大なる窓も入用なり  
 冬の間は寢所は毛氈を敷くをよしと出れは  
 春の大掃除迄敷き置き此時は至り取除くべし  
 冬の間は一週は少くも一度づゝは寢間を於  
 て火を燃せべし  
 成人小兒は拘へらむ凡て寢間の掃除は冬は早  
 朝は爲さべし且つ室中にて少し火を焚き人の



眠る前より十分は濕氣を拂ふべし。又、焚き火の  
 如何なる種類の花よりも又生長する植木の類  
 よりも夜分小兒の部屋に置くへうを  
 晝の子守り部屋も亦よく空氣を通すに成るべ  
 き丈も清淨なるをよくとし又道具に成る丈少  
 なく置くべし  
 手近の處にて能く閉じ込めたる押入の内は此  
 蘇油、大黃、麻屈、尼矢亞、などの手輕き藥種を置き  
 亦此等の藥を咽へ下を助とける菓膏、  
菓實と砂  
煮たるの燻をも備ふべし  
漬物の類

又一の箱に撒布と膏藥とを入を置くべし膏藥  
 は「ジョンイブソ」の製したるを最上とそ大き  
 へ瘡を激する事も無く又容易に落ぬものあり  
 又此箱に一挺の剪刀を添へ置き決して外の事  
 は用ふべからず  
 古きリン子の巻き物新らしき「フラン子ル」の  
 巻き物其外巻木綿は用ひべき小切を手近き處  
 に置くべし  
 乳母の藥の掛たる皿二枚、錫の錐子、砂糖、真珠  
 麥芥子末、亞麻仁などの入りたる壺を貯へ又龍



腦を含み多る揮發の飲料或ハ吐根酒をも所持  
をべー亦此等の品は添へて食温めの器アルコ  
の類 燭臺「ビスコイト」の箱ふどを置くべー  
母も乳母も一週間一度ハ押入を見巡り夜中  
急に入用ふる物の欠多て何らぬやを心付くべ  
小供ハ馳驅跳躍ふどもべー又よき遊歩を爲す  
小供の守りの時ハ左の通りふそ  
朝七時は寢床を起きて衣服を着け八時は朝飯

は就き九時は家を出て花園遊歩場又ハ野路  
をどよて小供の仲間と遊ぶべー○天氣の好き  
日やきハ午前二時むろ午後二時むろりの遊  
歩ハ必もよきを爲すべー○十月廿日より以後  
ハ六歳以下の小供ハ午後三時よそハ家に入る  
べー但ハ六の極めハ春まで續々るあり  
午飯ハ一時茶ハ四時三十分寢る時ハ年齢によ  
て六時ハ七時ふり又朝夕二度ハ冷水一杯づ  
ゝを與ふるハ最も良き藥あり  
朝の湯ハ四五歳位よて壯健ある小供ふそハ夏

小供の養生  
朝の湯ハ四五歳位よて壯健ある小供ふそハ夏



の冷水冬は微温の水を以て為さべし此湯は港  
 塩と海塩とを當分は交せ大なる黒き壺に入れ  
 こきし兩水を満たしめ壺の口を布をもて縛り  
 置くべし斯くして毎朝小供の使ふ湯は注ぎ入  
 るくを以て最もよきとを但し塩の全く溶くる  
 まては水を改むるまじく只新らしき水の  
 を加へ全く溶けし後水を改むべし  
 半身浴は朝湯の代り用ひてよし浴の仕方  
 は小兒の頭より手早く湯を流し掛け斯くして  
 六尺四方位のよく晒しよる段布の中は小兒を

捲き込み手暴らくおきやうに手早く水を拭  
 ふべし斯くおせば小兒のいまご母の手を離れ  
 ぬ内は既に手足の生長を見るべし次はよ  
 く干したる着物を被せ髪を梳り齒を掃除し食  
 事は就しぬ前は朝の神拜の詞を聞かしむべし  
 朝飯は早く調へ置くべし如何にとおし小兒  
 の性は多くは朝飯前へ心地悪く氣急しき者  
 かり斯る小兒は食物を欲するより起る寥しき  
 心地を堪ゆることの出来ぬやへあり  
 若し家内は斯る小兒ありて且つ多人數あり



家心徳書  
い順よく朝飯を仕度するの邪魔やあるゆへ斯  
うる時ハ「ビスコイト」菓子又ハ「パン」の切を與へ  
置くべし斯くもれハ朝飯の仕度調ひて呼ぶま  
でハ面白く遊ひ戯してあるべし

凍瘡の療治法

冬の嚴しき寒夜ハ凍瘡の苦痛あるて小兒の  
泣き叫ぶことあるとされ血の循環悪しきゆへか  
り斯る時ハ出の寒氣ハ壓されぬやう血氣の  
力を増せよと肝要あるやうなる小兒ハ幾那又  
ハ鎮劑の如き強壯藥を飲ましむるや  
勿論医師の指圖を

受く或ハ晝十一時ハ麥酒白葡萄酒を飲ましむ  
べし且つ足をハ餘り使ひ過こし冷さぬやうに  
せよ小兒若し歩行し或ハ是非なく足を湿し  
たり或ハ又遠足おせし時おどハ微温湯ハ  
海塩を交ぜ入せぬハ兩足を浸し次第お熱き  
湯を増し終ハハ血熱の度よまで至るべし斯く  
してこきを冷やさぬやうに大切ハ保ち温湯の  
内ハ手を入し試し其冷やハハるを覺ゆる迄  
其儘ハ足を浸し置き  
此間ハ面白き話ハ易し然  
る後柔らかき手拭をもち拭ひ乾し又静るし手

家心徳書  
早



をもてふきを擦るべし但し此方の凍瘡の見  
へたる即日施すべしやかくばふきを療治そ  
ること甚し難し且つ凍瘡の消へざる間ハ毎夜  
此の如くをべし  
凍瘡の痛むやどふあるまで棄て置きたるのよ  
ハ又種々の療治方あり茲はその一を示す破き  
ぬ凍瘡ハ稀塩酸一オンスの四分一龍腦水六  
オンス青酸三十滴を混合し用ひて患部を  
止まるへしやれども此薬ハ人の命に關係する  
大毒薬を含有する物なりハ手覺へ何ぞて暇と

心得ある人は何れもぬきを施すべし  
は母たる人の外ハ誰をも手を下さべし  
事なり  
凍瘡の初めて見へたるとき膿を持つを防ぐの  
にふらぎ尚ほ刺を痛くと痒み苦みとを防ぎ  
且つ其所の血の循環を勵ますは最もよき療治  
方ハ茛菪ニダラマの軟膏と烏頭一ダラマの軟  
膏と石炭酸十滴と一オンスの「コロガオンフレ  
キサイル」油を交せ合わせたるものを駱駝の  
毛の筆に浸して去きをその瘡の面はぬること



あり  
 以上ハ皆破きぬ凍瘡ハ施す方々をども既ニ破  
 れたる凍瘡ふハ別ニ施すべき手段なく唯其所  
 を十分ニ休ませ十分ニ温め且つそまニ新らし  
 き別の皮を張る付くるのこなり去の別の皮と  
 いふハ鶏卵の内面よりつきたる皮を以て作  
 る又ハ金箔師のふも様ニ金箔を置ひて作る  
 なり○此の如き場合は至まハ子供ハ子羊の毛  
 をもて編むたる莫大小足袋をえき替へ中央を  
 紐よてくハそたる者又ハ牡丹を掛け底をコ

ルクよて拵らへたる厚きものを着けベゴム  
 じめの膏おどハ決して去きを着くべらむ若  
 凍瘡の水膨れよあて壊せ或ハ肉の剥脱を  
 るおどよ至らバ鳥頭を止めて黄芩と石炭酸の  
 軟膏を用ふべし「ゴ、ロジオン」フレキサール  
 ハ空氣の當らぬやりハ其瘡を蓋ふ膜を作るふ  
 さまニ鎮痛軟膏も痛を弛めるの力あて無益  
 なるをのふあらび  
 手の凍瘡の破きたるふハ橄欖油の四分へ「グリ  
 セリン」を二分の割合よして去きをよく其手へ

家内心得

三



摩りたる後暫時その儘小して置き後よて手を  
 カスタイルソープ植物油よて製と微温湯を以  
 て洗ふべし吾輩の勸ふてハ手よも矢張カサネ莢トナと  
 柔らゝきグリセリンをぬるべし斯くおせハ斷  
 へど其所を蓋ふ膜を生じべし  
 凍瘡も時小よりてハ手強くおて其場所丈の  
 療治よてハ癒へぬ去とあり此の如きハ唯全体  
 の強壯よ赴くを待つのみ  
 大掃除の事  
 春秋小ハ大掃除を爲さべし春ハ通例五月秋ハ

十月おて此兩度よハ残りぞ家の道具を掃除し  
 又修覆を加ふるあり○此掃除をせん小ハ先つ  
 此度新らよふまへき品々を前より調へ置き又  
 不用の物おて家よ置くべしあらざる物ハ夫をく  
 處置をして外小送るべし斯くて後都合よき日  
 を定めて掃除者をきを雇ふべし若し家内の人皆餘所  
 よ引移るをよ一日小家中を掃除をべしやふ  
 あり其時の模様よより色々手順を替へる  
 ありきて掃除の當日小ハ掃除者の來らぬ前よ床  
 の毛氈を取り除け外よ出してよく打ちえとく



べし其外飾り付々の物もどの悉く取りえづし  
 又諸道具の上への布呂敷の類を掛くべし毛氈  
 を再び敷く時の温湯牛の膽汁を少し許り加  
 へ去るを以て其表を洗へば大ふ毛氈の色澤を  
 増さべし但し膽汁の香氣強きゆへ斯くして後  
 よく空氣ふ晒して去れを去るべし  
 部屋の<sup>けむり</sup>煙筒を掃除するときはよく心を付け筒の  
 頂上まで<sup>けむり</sup>箒の届くや否を見る去と大切あり  
 客の扱ひ方  
 客を招くときは前より坐敷は空氣を通すし煙

筒のいよき火を焚き客の胸を惡くする様お  
 る煙を拂ひ去り總てよく仕度を整へ置くべし  
 又客小膳を出るといよき馳走を供ふべきは  
 勿論尚又料理方の善きと献立の行届きたると  
 給仕人の静ふして能く氣の付るを譽めらるゝ  
 やり心掛くべしガラスの類はよく輝きてある  
 べく銀の器物もよく磨きてあるへし又ランプ  
 よてもガス燈よても<sup>あかり</sup>燈火を澤山は置くべし燭  
 燭もいよき最もよろし給仕人の成る文靜なる  
 へし男の召仕はよく慣れたる者よあらねし給



仕よ出をへるらも又既の別當おどを手傳は雇  
ふべあらび如何よとあまば出の輩ハ其平生の  
役前より起る臭氣何ぞて馳走の坐敷おどよハ  
別多てよく匂ふもの也へ上品の客おどよハ迷  
惑ふるべけきバチリ故は給仕ふハ奇麗ふる下  
女を出を方ダ男よその違ハ心地よかるべし  
馳走を十分よせんよハよく時候は叶ひたる品  
を供ふべし

家内心得草終

本編ヲ上木セントスルノ際會々東京ノ書肆某  
治家ノ法ヲ記セル書一卷ヲ遞送セリ余採テ卷  
首ノ數葉ヲ流覽スルニ英府龍動ノ婦人ウオ  
レン氏ガ僅ニ二八ノ妙齡ヲ以テ他人ニ嫁セシ  
ニ固ヨリ治家ノ事ニ慣レス渡世ノ道ニ暗キユ  
ヘ家政忽チ乱レ大ニ借財ヲナセシヨリ中途幡  
然志ヲ改メ家政ヲ改革シ遂ニ定額ヲ節減シテ  
一家ヲ支給スルノ方ヲ立ツルニ至ルマテ其間  
艱難辛苦ノ狀及ビ自ラ實驗セシ説話等詳細ニ  
之ヲ録シテ幼年婦女ノ未ダ家政ヲ知ラザル輩

家内心得草 附録七列



ニ示シタル者ナレハ恰モ能ク本編ノ意ヲ補フ  
ニ足レリ余因リテ急ニ筆ヲ下シ且巻首ノ數節  
ヲ抄譯シテ本編ノ附録トナス其意亦聊我國幼  
年主婦ノ鑒戒ニ供セントスト云

明治七年五月

穂積清軒識



家内心得草附録

妾ハ年尚ほ若きニ早く人の妻となり歳入限  
ある身代を預りし唯妾が生産の手段ハ慣  
やせしより幾度も窮迫の穴ニ陥り許多の難儀  
を受容しかり今嗚呼がましくもその事跡を並  
小物語らんとす  
さるをバ妾が婚姻せし時ハ年甚ど若くして我  
日々入用の品とても其價を知らむ唯吾夫の身  
代ハ恰も金山の如くさて何程の入用も差支  
なき無盡藏なるものとの思ひ儉約杯の事ハ





思ひも付らざればあはれい婚姻せし年の暮に至り  
出入の勘定少しも合えざるを見て始めて大に  
驚きとぞき  
ききど妾の夫の寛裕なる性質にして平生妾は  
向ひて何事も隠されし出とあき田へ妾も此始  
末を物語る小便もある心地し乃ち言ひ出るよ  
う吾夫下女の給料は此暮は拂ふべき約束され  
ども妾少しも其金を持たせし折しも夫の机に  
倚り書付を調へて何事し仰ぎ見て妾小問を  
るにこそ少婦をい何事なるぞ彼の金残は皆何

處に往きしやと妾の去きを聞くより忽ち潜然  
と涕を垂きて妾實にお去きを知らばされど妾が  
力小叶ふ丈の最も良きと思へる所をせしお  
とと啜り泣きして答へ多きは吾夫へ左右の腕  
よて柔らめし妾を抱き妾が胸のや、鎮まりし  
を待ち今に汝が有るし始末を残りば物語をよ  
り言ふをたゞしききど妾の出れは答へもせし  
て言ひらるいやても吾夫の何故は買物の帳面  
を見給はば妾をして斯く忽ちは金錢を費さし  
めたるやと吾夫の言ふらうい「ミルリ」  
妻の名余

家内心得  
村録



ハ汝をバ言分いぶんふき良婦よきと思ひ又汝を迎へてそ  
 の家内も善く治まを家事も能く整ひて兄弟姉  
 妹皆喜んで汝は従へを余は常々汝を見て世は  
 珍めづしき宝石の如く思ひ外何の掛念ケガレもせざ  
 ざしより今かゝる事に至きるなりあいなふ愛婦あいにふ今の汝  
 が難儀の始末を語り聞せよをを余も汝を  
 助くべしと妾をきば妾は下女の給料を拂ふ事  
 の叶はぬのをきり尚ほ彼の衣服も其外の品  
 をも渡さべき苦なり又肉屋は拂ふおとも甚だ  
 心元おく覺ゆるおると云へば夫をあらば試こ

は積見つみみるべし下女は二ポンド肉屋は八ポ  
 ンド其他は只下女の衣服のみをらん妾否々をき  
 のをきり尚ほ締高の十六ポンド程はあるも  
 の何と云へば吾夫は常は變かへる當惑あたふたの様子  
 まで妾を抱きし手も次第に弛みしが果たまに其手  
 を引きて己の頭を抱へたは妾が心の内いとい  
 悲しくおは吾夫は話し給へ喃話なんわし給へ必を怒  
 り給ふおといへば夫の言ふやう余は怒れる心  
 は何れをきども斯ごとく悲しき事の何れんと  
 は夢にだも知らさざると妾吾夫は心を拂ひ



給ふことの出来べきやと問ひおきハ夫の云ふ  
よふ固よりちうハねバ叶ハぬ事をきど甚だ  
心元おく覺ゆるかり汝も兼て知る通り余が  
汝と婚姻せし時汝の父ハ余が千ポンドの生命  
請合を持てるに何ハねバ許されざりき願ふに  
舅君ハ余の業前十分は進まば随分富人ホもな  
るべきまども人ハ死と云ふ事の何ぞて憐き  
みえ我が明らるる目的を妨くる事のあらん  
ことを豫メ考へられぬものなりん實ハ尤の心  
配あり今請合社よりの沙汰あてて余が明年分

の拂ひハ來る十五日を限ては渡さべしと云ふ  
然るを今此書出しを拂ハバ請合社の拂ひハ來  
年の歳入を遣ハ越さねバ叶ハぬかりやまきハ  
舅君の心ハ掛多らきハ大切の生命請合をハ保  
つこと叶えむして遂ハハこを失ふの場合ハ  
陷ひるもまこと圖るへりやざるあり幸ハ茲  
に運上の爲めハ貯へたる少々の金何ぞ愛婦汝  
の涙を収め心を取り直さべし余ハ斯の如き有  
様ホて汝を見るハ忍びざるあり妾云へるハ  
吾夫來年ハ君自ら諸勘定を扱ハ給へ妾ハ最早

附録  
二〇四



一錢をも握る事を願ひぬる事と夫云ふそハ吾  
ハ爲すべき業わざにもありき又出来へき事にも非  
ざる例へば毎日食事の献立けんりつを言ひ付餘り物も心  
を付け或ハ洗濯の勘定を計る杯數限はらいをふき瑣  
細なる仕事を理むるハ如何ぞ吾力も及ぶべき  
やと是等の細事の積るより一年の末も終  
ふ二百磅の高にも上るなり愛婦汝來年ハ勉め  
て去るを出精せよ天若し幸も我等ハ健康を賜  
はらむ我を共々ハ勉めんとして件の事ハ斯くて  
終へとるべき儲翌年の末ハ我ハ夫婦の中ハ一

人の女子を設け我々の幸福を増し得るが其年  
の暮る頃ハ我々をけむる妻の考ふるより今吾  
夫ハ話し今年も亦買物の書付を拂ふ事叶ひぬ  
と言ふとも吾夫ハよも怒るハせまじ其故ハ妾  
が瑣少の貯へ迄も幾度と無く去るを費し唯吾  
夫の日光の如き麗うるハしき笑顔と機嫌能き形ありさま状  
を見るをもて僅も妾が心を慰めたをど左も責  
めらむ右も苦めらむ折ハ世をあづきふく思  
ふ程の心配をふせし其甲斐もふく拂ひ盡して  
尚ほ二十磅の借財とふるたるをハ誠ハ餘儀

家内事草  
附録

五



ふき事と思へば、是れ既に斯る場合は及び、  
上の何の詮方も無く件の始末を逐一夫も告げ  
、是れ夫我等も、去るを拂ふと能はざれば、如  
何ふべきや、去るを拂ふと能はざれば、如  
ぞいざ、罪ある事と云ふべし商人等が我をよ  
貸したるもの、偏へは我の面目を信じたるに  
おぼ今こそを欺きてよあるべきや、悪人が己が  
空腹を支んとて人の麵包を盗むとを其咎は尚  
我等の罪よ、是も軽うるへしと言ひつゝ、暫し  
黙然として何ぞしが漸あきて困果てたる面

色よて此書出しを藏めよ、若し商人等が來りお  
ば余は告ぐべしとて其儘に入りたるを斯く  
て次の夜寢所に入りしとき、吾夫の頬を小兒  
を愛し、勞はまつゝ、不圖言ふや、愛婦汝はロン  
ドン小行くことを願はせやと、妾をい最も願は  
しき處を、是れ何を目當として行き給ふやと  
いへば、夫をれは、ロンドン小行くリチャルトフ  
エントン、氏ハ久しく病は罹りてあましか、今度  
官よと言付られ、フランスの南の地方へ行くよ  
付き彼の代り、其職業を爲せんことを余も望

家内心得草 附録 〇六



みしが彼を亦考ふるべし誰をも田舎住居  
をせむバ物事謹み深く只管正直に行ふものなき  
どもロンドンの如き繁昌の地は出むバ何より  
珍らしき事を好む始終同人の爲にふるべき計  
の常規に従ふまじとされバはや手紙を以て其  
住居の秋の歸國迄既に入らざる旨を傳へ  
たをききど其代りは五十ポンドの證券を余が  
許し送て越したるは去るを以て余は今より彼  
の地は赴き我等が住家を買ふへく思ふふは  
きておがらロンドンの借家賃の土地より

も高あるへしやい何らぞやと問ひあはれ夫の  
言へるは實ふしやを去るの地はくらぶを  
三倍程も懸るべしを去ると彼の地への引移り  
ハ畢竟利益ある事なるべしやるらに我々が  
費用の必む歳入の内にて限られたる高を越すべ  
あらばと腕々と決心を爲すは叶はぬふは汝  
も知る通りこの田舎にては二十ポンドを出  
せば相應の家をも借り得べくきの上地税など  
ハ唯名目のなきともロンドンにては去れと  
ハ大なる相違にて此等の金高にては僅し雨露

家内事草  
付録



家を凌ぐのこの家は其地税に必き家賃の四分  
一とも思ふべし妾やうむ今我等が費すべき高  
を細うし定め其の高を踰へざるよう爲さるべ  
かりき夫應へて言ふよう少婦よ其の丁度余が  
今汝の斯く出せあまきと望みし所を能く  
記憶せよ必き踰へてはなぬといふ出とを是  
れして三年の間は我が歳入を前取せよして諸  
拂を爲し來りたきども今ハ「リチャルド」よき好  
き折ふ證券を借り得たる代りよ返濟の爲め  
は晩く早くか生命請合の証書を失はぬいふ

らぬおや故よ今年ハ我が始終の拂をせんとい  
家具を賣らねば叶はざと妾の云ふ我夫家具を  
も賣んとし給ふ家具ハ決して賣り給ふお夫  
少婦然せざして如何で借財を逃るべきや我等  
ハ商人の恵ふ依りて生命を保つべくハ思はざ  
且拂をぬ上ハ買ふことも叶はば汝も知る通り  
余が持てる者ハ只余が一代の俸祿此人の先祖  
の家の代造も尚少々のみなり汝の父ハ  
嘗て余が生命請合の事ハ就き苦心せられし如  
く余ハ現在斯る場合ハ出遇ひて苦しむおや

家内事録  
附録



れい余の斯る場合の下は在るを恨む程この地  
を去るを恨まぬやうと斯る夫の形状さかたを見るよ  
うも妾のいさや哀苦に沈む有り多るを我夫の  
傍より頻る慰めとさき妾の生涯の中身の語  
りよ成る事どもい度々あはけきども此時の  
事のい永く記憶して忘るるあり斯くせし  
内忽ち一條の雄々いさき心地何處どこより來ると無  
く妾の心中に射らるる如く覺へしが忽ち力を  
得て言ひ出るより我夫願くは我入用の高を今  
直に定め給へ妾此度さかたをを守らんと瞬間しげんかんも後

きん出とを恐れ息をも繼が言ひけるを見て  
吾夫の妾の心急せいさを微笑しつゝ石筆を取  
り勘定を始めたまに妾の少時間外あきに出て再ひ  
來るに夫の言ふ「ミルリ」よ茲は總ての入用の  
メ高の事を共汝に此書付を一見せざる前は  
先づ茲も定めしる限りを越え可らざると云ふ請  
合の調印を爲さべしとさきと死に猶ほこゝを  
破るの恐れ何ぞと妾の云ふ我夫書付を讀み上  
げ給へ妾能くこゝを合點をべしとその時夫の  
件の書付を讀出せり

家内心得 附録 九



一 壹ヶ年借家賃並に運上	一二五、
一 壹ヶ年中石炭蠟燭の入用並に夫婦小兒及	
び下女の食料	但し下女ノ食料ハ二週間ニ
<small>十七シルリシダノ積リナリ</small>	三五〇、
一 下女の給料	但し一人
	五〇、
一 千磅の生命請合へ	一二五、
一 夫の衣服	一〇〇、
一 妻の衣服	七五、
一 小兒の衣服	二五、
一 洗濯の費用	五〇、
一 病氣其外臨時の用意	一〇〇、

妾の出の書付を指し二度び三度び操を返し其  
 ケ條を考ふるふ何きも餘であるより覺へりや  
 きば妾が借財を負ひたるい何故あるものと妾が  
 疑ひ更に解るざるよと妾の件の書付をパット  
 邊で小投げ棄て、獨り燈火の下に坐し心の内  
 は我が行末を讀むが如く頻りに思案しけるを  
 夫の見返まつ、「ミルリイよ何事なるやと問は  
 る、由へ妾尚ほ篤と考ふべきは明朝まで猶  
 預し給へ其時ふ出を精しく物語るべしとて其



夜に卧しとて借翌朝はあてりきい未だ起き出  
ざる前も妾が言ふよう我夫よ最早共は此地を  
去るべし妾は定めぬる高を踰へてい決して一  
錢も費をまどと定めたりきりあがら金錢は皆  
我夫の手も持ち給ひて妾の願ふ時一週間毎ふ  
渡し給へ夫の言ふいあふをべし但一事あて誓  
て汝は約をへしそい外ふらび決して借財を爲  
さざる出とあて實は此約束は汝の命は懸て破  
るることあては妾答へて謹み約を守るへしとて  
兩手を夫の方へ伸し未だ夫の目前を去らざる

我妻の心中は神を祈りて何とぞ此決心を守  
り給へ助け給へと念ふたはき  
斯くて出立し付要用の旅仕度を爲し家具の若  
干を賣拂ひ古き友達此人々い我家を愉快ある家と呼びて屢々來り遊び  
高を増せし我借財の及ひ竹馬の友は別れを告る  
杯夫々は付許多の艱難苦勞ありかども無益  
あまぞ茲は語らぎさて出立の日限近寄るは隨  
ひ馴れし里のいと惜しくあて況してや兩親は  
別るしことの悲しきい譬へん方あく殊は妾は  
不始未あてせば斯る事も起るまどぞ思ひし

家内小冊  
附録



四へ此不始末を責めらるる事この悲しく且い  
妾の父が我等の生命請合ひ必き己を失ひん  
としてすとも心配をるやうんと推したるは兩親  
よい今度の引移の譯い竟よその實を告多き  
き實よ此時の心地を譬ふまば罪人の競々まじりと其  
惡事の時と共に發いせんまを懼るるさま状よさ  
も似多し斯くてあるへき事ありぬい遂は暇乞  
の言葉を述て愈出立よ臨みし時の始めて自由  
を得たる心地にて妾の氣象も覺へて浮き上り  
たる如くなりと云

兎角もる程も無く早やロンドンに到着しけり  
家を尋ね得るまで先づ安宿の旅館を借りし  
が其心地ありくろるさき暮しの形状は實は譬  
へん様もふく己を為め妾の心も自然にらぬ  
つと多ほかりき茲よ又妾の大ひなる過ちい今  
度引移ふ片在所より年若き下女にて身體に至  
極丈夫やまどを物事にてへ少くも慣れさる  
ものを連れたるありこの妾も今度の最初より  
何事も儉約せんとの積りにて何ぞけるが全く  
諺よある一文各ちかの百失ひと云ふとを見過りた

附録  
世



るあま若し年長めて善く事小馴せたる者を伴  
ひさらんふい必き手助けをもなりたらんもの  
を助くることの叶はぬのゝあつびその所行の  
粗忽ある小兒を任うるゝおどい殊は心元あ  
く實は益も無き心配をあせをそれのゝあらむ  
彼が暇ある時の臺所にて我等が在所はあり  
時の事共は付雑談をあせしゆへ我等が去り  
來て未だ幾日も経ざるは旅亭の女主人は十  
分は我等の身の上を承知しとて却説きくめまは我等  
夫は日毎小家の探索は出て多分は時を費せと

も尚ほ見出さることなく日暮は疲果ていと  
力なく歸りしと屢々をいふ或夜言ひけるよ  
うい「ミルリ」は余は此頃よと見ゆる家の何  
る街は大抵あるきたと共我が定めたる借債は  
て汝の心は叶ふべき家は一軒も見當らば依り  
て明朝は此都より三里程隔りたる田舎へ行  
んと思ふやを斯くするふ唯少し夜は入る位  
の事にて別は難儀ある事は何らと變じたる所  
なきは亦相應は利益あるとなくんと思ふ  
は明朝は汝も勉めて余小伴ふべしとを詮

家  
録

三十三



本一合都合能く調ふべし妾答へてやりとて  
我う夫少兒を如何ふるべきア、シ下名の粗忽  
ものよい迎も小兒を任りて出る去とい叶い  
どき色の君獨りよて行き給いびい叶ふまゝ夫  
の言ふきとてア、シとて一日の間位いよ  
を障さやとい何るまゝ尚ほ家の主よ能く彼きよ  
目を付け呉べき様頼むべしとて止まる可き  
ようも何らぞ妾い夫の妾を伴えんと心決  
て動も可あらざるを見とをば夫の心は任り  
せしあども不吉の徴しるしよや心の内は甚だ嫌い

く覺へたてやて翌朝はかりし小兒の常は變  
いらひ機嫌能くてア、シも私の宝物小兒をよ  
能く心を付け衣服おとよも能く氣を付らん  
て固く約束をかり又亭主も貴娘かむまをば私の子の  
如く小心を付くべしと再應まで引請たをい稍  
安堵の思を爲して借家搜しよ出掛とて然るよ  
此日も仕合せ悪く多くの路を歩きたるども  
尚ほ見當らひ家の澤山あきとも其近邊まじりの穢きたき  
い譬へん方もなく子供ハ「パン」や「バタ」を頬張ほをり  
つゝ明け放したる戸口をい駈け出て又駈け入

源内玉身録 附録 七



家内行状 附録  
と蠣の殻もて洞を造り呼ひ叫ぶやら果ては喧嘩は蹴り合ひて互は争ふ其中は母親達はこの騒ぎを氣にも掛けぬ此處彼處の門口は打寄りて高らるゝ雑談をなす折は破るゝ如き聲もてこの放肆ある餓鬼共と呼び叫ぶるは妾悚々膽も潰せる計は思ひけり妾は兎ても斯る場所に住むこと能はば又場所のミからぞ喋りく織いしきは應じて何事も卑しくこそ見へたはさき妾の如き行儀作法ある中み濟ち者如何に斯る人の間は交はる去

とを忍ぶべきや斯くて此日も暮きとれば疲き足もて空しく家路をたどりつゝ尚ほも求むる家のあらんと思ひ幽々見ゆる隅々迄も残る隈なく目を付けたきども終は尋ね得ずして空しく歸り來つゝ見せば一間の内殊は綺麗にして爐の内は輝きたる火埋まてあり又小兒を見せし静は寢所は眠るたる形状其様子至るて息災は見へ別は子細は何らぬとも只妾は「ア、ン」ふ狼狽の様子あるを見とてさきと妾は一意は合点して「ア、ン」ガ我等の歸り來る前萬

家内行状 附録  
一  
二



事程能く整へ置うんとの心配よき起りし事ふ  
るべしと言へむ夫の妾の恐るゝを笑ひて言ふ  
より汝の今度の轉居は丹神經病を起せしより  
斯る怖きを生むるをうん見よや何よも不都  
合の事あらば明日も共は行くべしと偕翌朝は  
あま小兒の常の如くなき共至りて元氣好しと  
云ふよは何れぞされど夫の妾は新奇の手遊を  
與へし故彼をいささかふ氣を奪ひきて食をも好  
まざりし故あまんとその心よも掛りて復た  
も残りて出たをけり此日の暮は家の漸く搜

し得たきども何分借債高く「リンコロ」の法學  
校よる四里程も隔るる所よき向きは建  
てたる小き家あるが其借債三十「ポンド」にて地  
税年貢杯を合せて七「ポンド」余乃至八「ポンド」と  
言へり因りて先方への尚ほ篤と勘考の上明日  
の夕刻までと駈と取り極めんと約しあま我が  
兼て定め置きし地税運上の高よる七「ポンド」程  
増したき共昨日よるへ稍力ある心地しつゝ、  
て歸り來て見せし小兒の前日の如く寢所は眠  
りて居けるが其面色をあら朱の如く去る全



く室内の熱氣は侵をせしふらんと思ひ做せし  
る但怪しきハ「ア、」の眼中穩々ふらば其周章  
一方ふらざるかよりて妾ハ「ア、」は向ひ今  
日小兒ハ如何せしやと問ひ多きバ彼をハ答へ  
て至極御丈夫にて何ぞつせと毛只少く咳せきの出  
るのミといふ妾をらば何より咳を起せしや汝  
ハ小兒をむ外は連を出て、遂は吾が指圖は背  
きしや彼れ言ふ奥様の御他出の後ハ戶外は連  
出てもてハやせしこと杯おしと夫ハ妾は言ふ  
よふ汝ハ小兒の事より終は病を起るべし先

つ余は茶を與へよと妾ハ之を聞し時を心の  
忤ふ少く怒りたをども忽ち思ひ直して否々今  
日ハ家を捜せし時我夫ハ妾をバ都合好き所は  
休ませをき自身ハ家の何らんと思ふ所ハ大道  
小路の差別をく東は馳せ西は走り其疲を一方  
ちととと推し多きバ直は茶を勧めをせしよりハ  
今日探し得たる家の得失は付細くある物語は  
入る折しも不意は咽喉症いんげんしやうに似たる咳の聲寢所  
の内より聞へけをバ我等二人驚き起て眠りた  
る小供の方へ走り行き妾ハ直は小兒を抱き揚



くきば尚ほ續ひて咳を吐き息を喘へぐ故吾夫  
の直ふ帽子を取りて外は走り行き一  
人の醫者を伴ひ来る妻はその間「ア、ン」と家  
の主を呼び來たを醫者へ入り來るや否や早  
く「ア、ン」目を着くれは彼を畏れて忽ち  
部屋の暗き所へ引込きたる又小兒の尚ほ  
擧カを起し多し實は此時の恐ろしき形あり狀の幾年  
を經後迄も想ひ出せし今日の前へ見ゆる心  
地おど斯くて小兒の暫ふくが間へ死よもすべき  
形狀よて息を喘きてあるのミをを醫者も此

夜に屢々見舞ま來たは次の朝は赤て病兒の  
苦痛少く息りたる時醫者へ夫を戶外へ呼ば  
告くるや貴嬢へ最早望ふ救ふべからむと  
且つ云く此事は付貴君へ彼の下女に一礼言ふ  
へき去と何れ其仔細は余昨日此旅宿よて瘧瘵  
咽喉焮衝は苦む小兒あてて見舞ま來ると  
き彼の粗忽なる子守りの腕は抱をきたる小供  
を見多し即ち貴嬢よてあて彼の子守をへ貴  
嬢を抱て件の病兒の顔の顰縮をを眺めつ、  
床の側よ立てりその時貴嬢の頭よ唯子守の

家内心算簿  
附録  
二二



前垂一枚のみを被せりきと余は同家は在る  
兒あるを知らざりしバ唯彼の子守りも速に  
兒を連れて家へ歸り兒の既も危き狀を兩親小  
告りよとのと勧めたりきやても余は過てり其  
折下女小住所をぎへ尋ねあは恐らく斯くる悲  
歎も遇はきやと斯くせし内小兒  
へ拘掌益甚しく小き體を拘き緊め青白き面を  
縮め恰も生と死との戦も似て今も死ぬべき  
呼吸あるを見る母親の心中如何ある苦痛もて  
何るべきぞさて吾夫の再び室に入り來る時ハ

既小妾の兒無きの妻ふると言はん計りの顔色  
よて妾を見たて妾ハ斯くと見るより竊のよ夫  
は耳語早や望あきややても天の業なりけるの  
と言ふ内夫ハ跪きて痛の爲も曲るある小兒の  
細腕を自身の手も握り何りあるが間もかく小  
兒の急しき呼吸も止まり拘掌も弛み凡て静ま  
るなり死せし夫ハ徐々も妾の膝より枕と共に  
小兒を取て去きを長椅子に置けり妾ハ此時  
ふは却て涙も出でば兩眼共も熱く乾きて悲し  
む事もあらば亦我が兒を失ひし去とも誠とも

家内傳記 附録 〇〇



思ひまを程なく吾が夫へ出で、彼のにくむべ  
き下女を連れ來り徐々は一間の舟へ入をやが  
て言ふやうに汝の知らざるや汝の實小我兒を  
殺せしを彼跪ひて答て云ふきてく且那よ私に  
斯る事を爲さべくとい夢をも思もぎさし又  
如何なる害のありしかをも知らざりしと夫然  
らば何故昨日醫師より汝に申しある通事早く  
我等にい告ぎさしや彼を云ふ昨日醫師の大  
は怒りし形状にて若し私が此を告ぐれば必  
叱られんと言ふ如き様子なりをば私への怖

めてこれ迄告ぎさしあり夫復ひ言はん汝の  
實小我兒を殺したると此時下女の甚だ哀しき  
面色にて妾を眺むる故妾ア、こよ最早夫迄  
て十分おと疾く去るべしと云ひしとも尚ほ  
暫くは戸外に在りて胸も破るゝが如くは咽か  
へて何り尋て妾も心の中は若し妾が借財を  
ばせざりしありば斯る事も起るまじきもの  
を都し出で、斯く迄自ら造りし不仕合は逢ふ  
ぢらば寧田舎に在りて安樂なる母なる方が勝  
さしよと竊うは己の身を悔みつゝ日頃より



妾の胸は宿りし氣落して心も石の如くはふり  
 たりやをば妾が斯うる嘆き逢ふおとも皆妾  
 の粗忽より出ることおをば天の業といふ可  
 ろらば身より出る鏝きびふりと思ひ妾ハ心も  
 聲を出して語りぞ唯妾の前は在る小兒の死体  
 を見まば過ぎし事を思ひ出て夢の幻うたがひ今尚  
 目小視ゆる心地せし子無き父い何ふかち妾  
 を慰めんといせざを共妾が斯うる有様おをぞ  
 態と氣強く小兒の死體を眺め居けり斯うる所  
 へ此家の主あつ來り戸を敲くよぞ其音は我等ハ始

て恍惚うたがひの夢を醒まきをたし主ハ軀からだて尋ぬるよ  
 う何より相應の用向何らば遠慮なく言ひ付給  
 へとやれ共妾ハ何事を頼むよも懶ものうささき程胸破  
 れ只點頭計りよて何ぞしる夫ハ軀からだて室を出て  
 小兒の死は付万事の指圖を爲し多し主ハ謹つつしみ  
 て事を取て行ひ己が所持おせる客前の蒲團は  
 小兒の死體を卧せしめ吾ハ居間の隣は置け  
 ば此外要用ある事ハ亭主自ら手を下して之を  
 爲せり又主の召は應じて葬式の世話人來り杯  
 して主ハ成るべき丈我ハ入費の多うらぬより



色々と心配しては斯くも内此日も暮れて苦  
しき夜に入ると色々吾夫の早く妾と共に寝  
就きし頃今泣く去とも出来又妾をも慰めん  
とゆして他を憚らば種々の語を吐きたるや  
れ共妾の目の尚は熱く乾きて涙も出で只漸く  
家の内を歩む去との出来るの妾は又始よ  
り手拭を幾度とも無く指して去き齒にて噛  
遂に切れ割ると思ひを知らばいつの切々よ  
ふて膝より落たるとき斯くて我等が室を出  
とせし頃へ最早夜明までありて我等は

室を出んとしては又止り互に小兒の死體を眺  
め視るに實に神聖にして罪なき顔の美はく  
妾は堪へぬ縁近寄つて唇を吸ひ去るに氷の如  
き冷氣吾五體に徹りたる共早や救ふべき詮を  
べとてい何れやとて吾夫は僅くは寝ねと共  
終宵夢に驚き去るに妾は又窓外に有る瓦斯  
燈の光を小映し出づる種々様々の想像の影は  
目を留めてありて少時合眼かと怪む内忽  
ち咳の聲は驚き去る程は夜も明方近くあり  
想はてありて鬼角を程は夜も明方近くあり

夜半の事  
附録  
〇〇〇



一頃妾の腦ハ煮ヘるガ如ク又沸クガ如ク又  
頻リ眩暈めまいを覺ヘ僅わずかニ動クことの叶ふのみな  
れ共急いそぎ上着かみぎを肩かたニ掛かけ足を引ひひて階か子を下  
リ邊あそて一ひとまゝニ兒この隣かたニ在あるを忘わせて先ま坐ま鋪つ  
ニ入いりとき早くも目めニ付つき一ひと者ものハ兒こヲ食く事こと  
の時倚よりたる椅子いすの側かたニある小こき一ひと對たいの靴くつニ  
り妾めかけハ去いきを見るより遂つニ自然しぜんの情なさけの露つゆれて  
降ふリ灑まぐ涙なみだハ流ながるゝ如ごとく手足てあしハ振ふるへていつ  
ハ神氣しんきを失うひ右みぎの靴くつを手てニ握にぎむる儘まま椅子いすの上  
ニ倒たれぬニ吾夫わがととハこの物もの音ねニ驚おどきて出でて來きり

妾めかけの側かたニ立たちけるが暫時しばしばの間まハ流石ながしの道理ことわりも  
小兒この椅子いすニハ動うるがれたる形かたちヲ見みるがと  
も妾めかけの愁傷しみを慰なぐさめんとして愛あいの及およぶ所ところ詞ことばニハ述のべ  
へ仕打しうちも爲なす出來できる丈ほどの事ことハ色いろ々と盡つくした  
れども尚なほほ茲こゝニ妾めかけの心こゝろを刺さす者もの何なにぞそハ妾めかけガ  
神かみの意いニ背そむき一ひと事ことハ何なにやらんがと疑うふがときき  
せど自みづから問とひ顧かへみて又また痛いたく自みづから答こたへ否いな々々今  
度たびの事ことハ神かみの所ところ爲なすが非あやまを我われガ自みづから造つくりし罪つとみ  
こと今いままで想おもへば是等これらの詞ことばハ恐おそらく睡語うらみごとの中  
小吐せうとき一ひとあるへし此時いまハ却かへて涙なみだの爲ためニ助



けらき稍起居も出来る心地あり今も暫時も  
猶豫いせざりしども只小兒の死體を見れば  
兎角は嘆を引出せりや色ば吾夫に埋葬くわいばうの日に  
至らば妾の身は必定變事の起るあらんと恐れ  
て有しう共當日はをきい妾も終は棺を取らむ  
て敢て争いど己も車に乗せ葬式人の一人と  
して野邊の送は随へり偕て歸る來て見れば家  
の常よりゆいと物寥しく見へ妾が先づ言出た  
るに我等早く此處を去らんとこの詞あり  
譯者曰此編説話ノ主意卷首ニ概言セシ如ク

ウオーレン氏ガ數年ノ艱苦ヲ嘗メ經驗ヲ積  
ミ遂ニ定額ヲ節減シテ全家ノ支給ヲ工夫ス  
ルニ至レル顛末ヲ叙セシナリ故ニ今僅ニ卷  
端ノ數節ヲ抄譯セルノミニテハ首尾未タ完  
全ナラス然レモ其局ヲ結ブニ至ラシニハ原  
本尚ホ數十葉ノ紙數アリ淺日ノ能ク卒業ス  
ヘキ所ニ非ス今本編ノ上木ニ際シ猶豫スル  
ニ違ナシ故ニ姑ク之ヲ後日ニ譲リ此ニ閣筆  
ス讀者冀クハ此意ヲ諒シ次編ノ出ルヲ待テ  
隔靴ノ想ヒヲ銷セヨ



家内心得草附録終

明治九年二月廿四日版權免許  
同年五月一日刻成

抄譯人

出版人

故人

穂積清軒

青山清吉

第四大區小三區

小石川大門町廿一番地



### 青山堂新刻略書目

海軍兵學寮御用出版所

書林

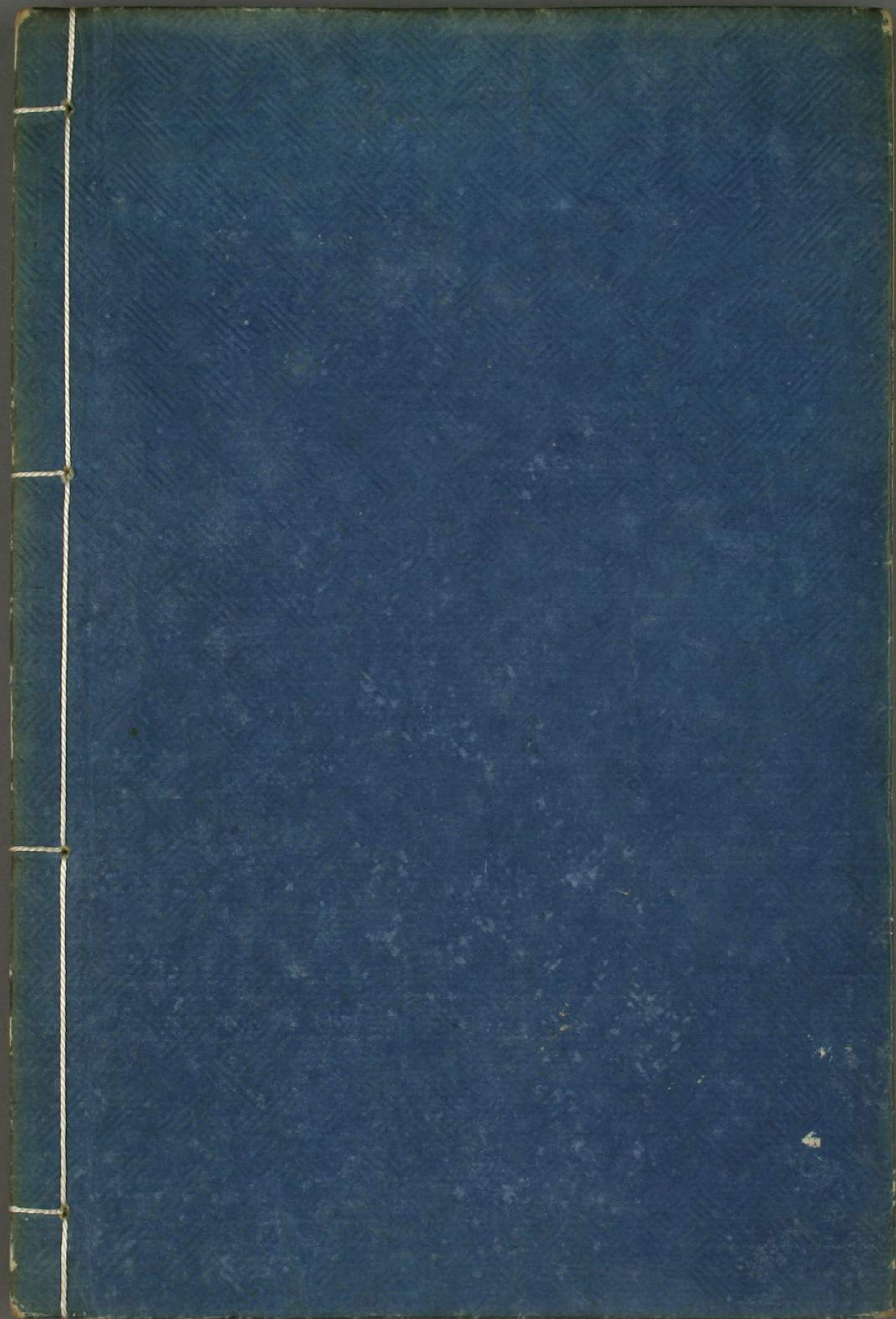
青山清吉

格物入門 博物新編譯解增訂 同後集動物學部 同橋爪氏著 增訂和譯地理全誌 植物學和解 化學初階和解 日本地理撮要 啟蒙西洋名數 訓蒙支那史 漢語字類 新撰字類 皇國地理書字類 日本外史譯語 中漢語早引 制度沿革使覽	童蒙必讀 讀本會話編 小學日本文典 智恵の絲 小學綴字教本 小學生徒心得 小學教師必携 新撰千字文 童蒙書牘 單語編訳解 繪入智恵の環 小學畫學書 養生手引 農業三事	世界商賣往來 同習字本 同用文章 東京地學往來 西洋農業往來 啟蒙英語往來 漢學九體往來 消息翰墨往來 華算うひ學 獨何うひ學 洋算獨學 英算獨學 數學教授書 西洋塵劫記 同代數學	童蒙教育の器具 西洋圖手本 組合地圖 東京小石川大門町雁金屋	五十音 日本國書 繪入單語 皇詔歌 單語讀本 習字縣名 其外追々出版
--	--	--	---	--











明治九年五月新刻

穗積清軒譯

# 家內心得草

一名保家法

東京  
書林

青山堂發兌

